



TITLE:

<大會抄録>第二次立憲制期のオスマン海運：官營汽船の民營化をめぐるめぐって

AUTHOR(S):

小松, 香織

CITATION:

小松, 香織. <大會抄録>第二次立憲制期のオスマン海運：官營汽船の民營化をめぐるめぐって. 東洋史研究 1998, 57(3): 493-494

ISSUE DATE:

1998-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155212>

RIGHT:

落地税實施等の釐金改革を伴い繰返し試行されていった。しかし、こうした政府の施策にもかかわらず、認捐制度はついに廢止されることなく、袁政權以降も存続していく。

小報告の課題は、以上の一連のプロセスを、上海を中心とした認捐制度の實態を踏まえつつ検討することにある。考察に際しては、認捐制度を同業團體による同業者統制、子口税制度、あるいは上海における租界の存在とも絡めながら論じたい。

十七世紀初頭の中央アジアにおける

死地蘇生文書について

磯貝健 一

本發表では、發表者がウズベキスタン共和國留學中に入手した、これまで中央アジア史研究において殆ど用いられたことのない死地蘇生文書という史料を、そのベルシヤ語テキストの解釋と文書書式の検討に重點をおきながら紹介する。イスラム法において死地とは一般に誰の所有下にも置かれていない荒蕪地を指し、死地蘇生 (ihya' al-mawat) とはこうした荒蕪地を農地として再生する行爲を示すが、注目すべきは蘇生した土地が蘇生者の私有地に轉化することである。文書は大きく二つの部分に分かれたれ、前半部では蘇生對象である土地がイスラム法で定められた死地の條件に適合することなど、この文書で扱われる死地蘇生行爲の法的有効性を確定するための形式的文言が連ねられる。一方、後半部は末尾を缺いている

が、殘存する箇所を見る限りでは死地蘇生を實行するうえで蘇生者が直面した難事やその奇跡的な解決などを伝える一種の説話形式をとっている。ここでいう蘇生者が直面した難事とは、蘇生對象地の灌漑に用いる運河開創にかかわるものである。イスラム法上、死地蘇生という行爲の中心を占めるのは蘇生對象地を灌漑するための水利施設を建設することであり、説話形式をとる本文書後半部も、難事業を遂行した蘇生者を賞賛するためのみでなく、件の死地蘇生行爲の法的有効性を強調するために作成されたものと考えられる。

第二次立憲制期のオスマン海運

——官營汽船の民營化をめぐる——

小松香織

十九世紀中葉以降汽船時代の到來に伴い、オスマン政府は、自國海運の近代化と對外自立とをめざし、ナショナル・フラッグの育成に乗り出した。しかし、そのありようをめぐることは、當初から民營を主張する商業・公共事業省と國營に固執する海軍省との間で激しい論議が繰り返された。その背景にはムスリム・トルコ系エリートと非ムスリム系の經濟官僚・資本家という二つの勢力の對立があった。

アブデュルハミット二世の専制期には、このスルタンの厚い信頼を得た海軍大臣ハサン・ヒュスニ・パシャの下で、前述の海運企業は海軍の直轄下に置かれていた。ところがこの間目標としていた成

果をあげることはできず、オスマン帝國海運は次第に外國船の手に握られていく。そうした中、一九〇八年の青年トルコ人革命は經濟界にも自由主義的機運をもたらし、非ムスリム系の影響力の強い商公省の指導の下、低迷を續ける官營汽船を民營化することによつて再生しようとする計畫が立案された。しかし、これは事實上外國資本への拂い下げを意味していたため、議會では反對する勢力も多く實現しなかった。

本報告では、官營汽船の民營化問題について、當事者間で交わされた文書、契約書、議會議事録等により事實關係を整理し、計畫が實現に至らなかつた経緯を明らかにし、そこから浮かび上がつてくる第二次立憲制期という政治社會状況下での二つの勢力の對立の構圖を考察したい。

近代のイラン＝トルコ貿易と非ムスリム商人

坂 本 勉

中東イスラーム世界を對象とするこれまでの經濟史、商業史の研究は、どちらかと言うとアラブ、イラン、トルコといったかたちの枠組を設定しつつ一國史的なアプローチをしていく場合が多かつたように思われる。しかしながら、ボエダーレスな經濟がますます進み、また一九九一年のソ連邦、ユーゴスラヴィア崩壊の餘波をうけて中東イスラーム世界とその周邊にいくつかの廣域的な交易市場圈が生まれようとしている現在の状況を念頭におくと、今までのよう

な一國經濟的なとらえ方には限界があり、國を越えた廣域的な交易市場、ネットワークが中東イスラーム世界において歴史的にどのようなあり方をしてきたのかを探っていくことが必要だと思われる。

このため、發表では十九世紀におけるイランからトルコにかけての地域を有機的なネットワークで結ばれた廣域的な交易市場圈としてとらえ、その構造がいかなるものであつたのかを考えていくことにしたい。この市場圈で流通した代表的な商品として絹（生糸と繭）、絨毯、タバコ、綿製品、羊毛などを擧げることができが、このなかで最後の二つを獨占的に取り扱つていた非ムスリム商人、とりわけアルメニア商人の貿易活動、商業ネットワークを見ながら近代のイラン＝トルコにおける地域間交易の實態を明らかにしていきたい。

朝鮮初期における經濟構想

須 川 英 徳

朝鮮時代前期（十五・十六世紀）における國內商業は、同時期の日本に比するならば、不活潑な様相を呈していたと言わざるをえない。十五世紀後半になつて場門（後には場市）と稱される定期市場が南部地方から出現しはじめて全國に擴大していくが、これは農民たちが自家の生産物を販賣して非自給的な手工業製品などを入手する場であつた。他方、各郡縣の行政中心である邑城は地方官衙に勤